★海外文献紹介★

魔術の効用

——昔話の発達的有効性——

THE USES OF ENCHANTMENT
by Bruno Bettelheim
New York: A.A. Knopt, 1976

人間を考える基盤として、神話や伝説など、昔話の役割が見直されている。教育課程をより人間的に改善する試みの一環に、神話を位置づけようとする論稿が、"Childhood Education"誌などにも現われ始めた。そんな動向の中に、現代アメリカ文化の幻想志向の一端を見ることは、容易であろう。アメリカ合衆国もまた、世界的な知性の流れに背かず、行き過ぎた合理主義からの脱却を模索している。健やかな過去をふり返り、日常的現実の彼方を透視するまなざしを、よみ返らせるべく努力しているのだ。

情緒障害児、特に自閉症児の治療家として高名なブルーノ・ベッテルハイムが、昔話に関する大部の著作を刊行したのも、このような背景の上で把えるとき、一入(ひとしお)、興味深く思われる。「魔術の効用 (The Uses of Enchantmnt)」と題されたこの本の独語版は、「昔話は子どもの成長に必要」という、より直截な題名を附されているという。確かにこの書物は、独語版題名の示すとおり、現代文化の中で成長する子どもたちにとって、昔話の発達的有効性を論じようとするのである。

昔話の効用

著者は、昔話と子どもの発達との関連を論じて、次のように言っている。すなわち、子どもの養育に関して、最も重要で最も困難な仕事は、彼らが自分自身と出会い、自分が生きていることの意義を見出すのに、手を貸すことである。障害児と呼ばれる子どもに関してもそれは同様であり、彼らの治療教育もまた、子どもたちに生きることの意味を取り戻してやること以外にないだろう。そのためには、子どもたちを、現在を肯定し得る感情の中に置いてやらねばならないし、将来に対して希望を抱き得る状況を作り出してやらねばならない。昔話は、それに答え得る最もふさわしい素材なのである。

何故なら、一般には、子どもたちに、人生の明るい面だけを見せようとする傾向が支配的である。そして、恰かもそれが、彼らの肯定的な感情とつながるかのように、短絡的に考えられている。然し、子どもといえども、人生のダークサイドから目をそらすことはできない。何よりも彼ら自身が、無意識の暗い力を内に湛えた存在であって、それらを拒否しようとするなら、逆に、その力に圧倒されてしまいかねない。むしろ、それらを見つめ、適切に対処することでそれを克服することが肝要であって、実存の苦しみとは、まさにそのようなものなのである。子どもたちもまた、人間の一人として、常にそれらの苦しみと闘い続けているのだ。

昔話はこの点で精神分析と同じである。つまり、人間存在のダークサイドに積極的に目を向け、それらを扱っているのだ。例えば昔話には、両親との死別或いは生別から物語の幕が開き、それによって様々な障害との戦いが始まるものが多い。両親との別離は、子どもにとって、成長途上に横たわる最大の難関であるから、まさに実人生そのものの反映でもあり、同時に、最も暗く不幸なできごとの象徴でもある。そこで、昔話は、それらを主題に据え、しかも、それをメタファーとして扱うことによって、子どもたちの実存の苦しみと極めて適切な向き合い方で、つき合っていくことができる。現代の子どもの本が、とかく暗いテーマを避け、日の当る部分だけを描こうとしているのに比し、昔話の真実性がここにある。

現在を肯定的に生きるとは、暗いものに目をつむって、ただ徒にニコニコしていることではない。暗く重苦しいできごとも避け難く存在している現実を、「生きるとは、そのようなこと」と肯定して、その上で、積極的に乗り越えていくことなのだ。昔話は、そのような意味で人生そのものであり、象徴の次元でまさにリアルなのである。

しかも、昔話は、それら障害の克服のモデルを、物語の展開という把えやすい形で示してくれる。ヘンゼルとグレーテルは、自分たちのちえで魔女を殺して幸せをつかむし、白雪姫は王子と出会うことで、死の棺からよみ返ることができた。

現代文明という巨大な歯車の中で生きることを強制されている子どもたちは、さながら森に棄てられた物語の主人公のように孤独である。主人公たちが、果てしなく広がる森の中で、孤独な戦いをいかに戦い抜き、究極的な幸せをいかにしてつかむかは、子どもたちにとってこの上ない人生のお手本となり得るのである。

分析的解読の面白さ

この本の魅力の一半は、著者が試みる昔話の精神分析的解読の面白さにある。グリム童話をはじめとする二十余りの物語が、フロイト派の分析医ベッテルハイムのメスによって、鮮かに解剖されているのだ。

人間の人格構造を、イド、エゴ、スーパーエゴの三体系から考えようとするフロイト流の人格理論が、昔話の構造分析に投影される。例えば、「三匹の小豚」の物語の中で、藁の家を建てる一番目の豚は、欲望のままに振舞うイドの象徴であり、苦労して煉瓦の家を建てる三番目の豚は、エゴとスーパーエゴが発達し、人格の統合された安定状態を象徴する、と言うわけである。

さらに、口唇期、肛門期などと区分する発達説が、形象解釈に適用されて、「お菓子の家」は、口唇期的欲求の典型的な現われと読み解かれる。「お菓子の家」を貪り食べたヘンゼルとグレーテルが、究極的には魔女によって食い殺されか

けるという、口唇欲求の肥大化に直面し、一身の破滅に脅かされることになる。勿論、二人が全エネルギーを自我に集中して危機から逃れ得たのは、先に述べたとおりである。

フロイト理論を代表するかの感があるエディプス・コンプレックス説も、随所に顔をのぞかせている。というより、著書の後半は、エディプス的な諸問題に捧げられ、そのような見地から物語の解読が進められているのだ。エディプス・コンプレックスを、子どもが両親から分離独立するときに生じる障害との戦いと、広義にとらえるなら、それは、人間の成長にとって最も重要な課題であるに相違ない。母の言いつけを守れなかった赤ずきんの受難も、シンデレラや白雪姫の継母との確執も、すべてこの課題をめぐる多様な展開であり、克服の道すじを物語ることになろう。

こうして、ベッテルハイム流に昔話が読み解かれるとき、私どもは、次のような驚きに襲われるだろう。「昔話は、こんなにもよく、子どもの内的な世界を物語る素材であるのか」と。そしてまた、「昔話は、どんな教材書にもまして、子どもの、否人間の、内的世界を解き明かしてくれるのではないか」との想いにとらえられざるを得ない。確かに、二重、三重に読み解く眼さえ身につけるなら、物語は、人と世界を映し出す奥行きを持った鏡として、限りない深みに読み手を誘いこんでくれるに相違ないのである。

附記

この本は、現在、翻訳が進行中であると言われる。邦訳書を手に取る日の近いことを期待したい。また、昔話の深層心理的研究として、ユング派の碩学河合隼雄氏の労作が、先ごろ単行本として刊行された。* 前者はフロイト派、後者はユング派という党派性を超えて、どちらも昔話を手がかりに人間心理の深層に迫る試みであり、また、一方は効用を説き、他は人と文化の原質的なものへと眼を向けさせている。私どもは、これらの著書を手にして、「物語の意味」を改めて考え直す機会を持つことになろう。

* 河合隼雄「昔話の深層」福音館書店一九七七・一〇

（本田和子）